

スーパー読者の
経営力が選ぶ

あの商品この技術 28

稲作農機のセルフメンテや 自作資材でコストを削減

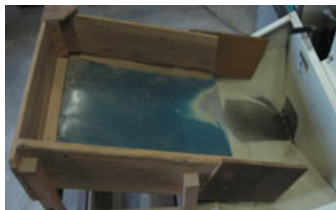


岐阜県大垣市上石津町
高木正美 氏

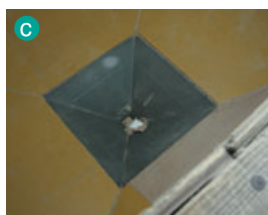
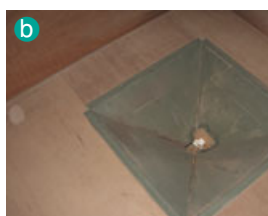
【経営データ】

■面積／水田21ha、2006年産はこのうち17haで作付け。顧客の要請に応じてコシヒカリ、ひとめぼれなど7品種。
■労働構成／基本的に1人で作業。■取引先／米穀店のほか業務筋を中心に一部JA、個人客。

※■内の数字は資料請求番号です。



乾燥機は、16石×1基、28石×2基、45石×1基。中小型の乾燥機を活用しているのは、受託している水田ごとにコメを管理し、「自分の田んぼでとれたコメを食べたい」という地権者の声に対応したもの。右下の写真a~cは、モミを一時貯留する倉庫2階の様子。bでは床面がフラットなため、残ったモミをほうきで掃く手間がかかったが、cでは傾斜を施して改良を図った。



コメの販売で大きな利益を見込めない情勢の中、支出を圧縮することで利益率を向上することも重要である。農機のセルフメンテナンスや自作アイテムの導入でコストダウンを徹底し、中山間地の特徴に適合した経営スタイルの確立を目指す。

写真上／乾燥機の張り込み口に設置された手製の傾斜台。フレキシブルコンテナに入ったモミをここに注ぎ入れ、こぼれ落ちることなく乾燥機にかけることができる。

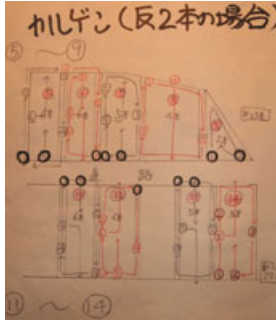
写真下／モミ殿は倉庫外壁から突き出したパイプを通り、トラックの荷台に溜まる仕組みになっている。これらのシステムはすべて高木氏による手作りである。



岐阜県の西端に位置し、養老、鈴鹿、伊吹の各山系に囲まれた上石津町。高木正美氏が稲作経営を行なうこの地は、町内の85%が森林という中山間地だが、名古屋・大阪といった都市圏にも近く、農業以外の就業機会も多い。そのため農家の後継者の多くがサラリーマン化し、さらに親世代の高齢化が進むと共に移住してしまう家庭が多いため、高木氏のような有力生産者への農地集約は避けられない状況となっている。

公務員で財務課に勤めていた時代に学んだ事務能力に加え、事業者としての体験から、高木氏の経営スタイルには徹底したコスト意識が根付いている。コメの生産販売で利益を向上させることが難しい今、いかに支出を削減するかが課題となるが、高木氏は農機の補修を可能な限り自分で行なうことによりコストダウンを実現している。また作業の効率化を図るため、積極的に自作アイテムを導入していることも特徴である。

たとえばコメの乾燥ラインでは、張り込み口に手製の傾斜台を設置。



小規模な水田が多い中山間地では、大型機械の作業に無駄がないよう、走行ルートや資材置き場をあらかじめ設定。水田を図面化し、綿密な計画を立てることで、単独作業での最大処理を可能にしている。大型機械はいずれも三菱農機製⁵⁾。コンバインは3条式と6条式を各1台、トラクタは62psと42psを所有。プラウはスガノの12インチ×5連水田用リバーシブル⁶⁾を使用。



東海地方の中山間地には、インシシが多く出没する。その害を防ぐため、すべての水田に電気柵を張り巡らせてある。納屋には電線やポール、バッテリーなど、おびただしい数の関連資材が山積みだ。これらの設置に手間やコストがかかるだけでなく、草刈りもすべて手作業で行なうことが経営上最大の負担となっている。



天井走行クレーン付きの電動チェーンブロックで、納屋の2階に農機を運び上げ、保管・補修を行なう。縄ない器や足踏み式脱穀機などの文化的農具も保存されていた。



周辺の山林は人手不足による管理放棄が進んでおり、その手入れを請け負うこともある。チェーンソーはプロ仕様のハスクバーナ社製288XP⁷⁾だが、ウインチは廃棄品を有効利用し、組み合わせて作業している。林道は一般公道にあたらなないため、山作業の際には、ナンバープレートのない古い古車を使うことも。高齢化が進む山村において、高木氏には地域の農地管理という課題も委ねられている。

フレキシブルコンテナのモミを、無駄なく効率的に張り込めるように工夫している。乾燥させたモミはプロアで2階に運ばれるが、ここにも自作の貯留槽を設けている。槽の底面には傾斜があり、モミが滞留することなく流れるが、これも試行錯誤の末の工作技術である。

またトラクタやコンバインといった大型機械は、中古品を調達。当初は整備士に修理を依頼していたが、それを観察するうちに技術を覚え、現在では自家補修の徹底を図っている。これにより、年間100万円以上かかっていた修理コストを、1/10に圧縮することに成功した。こうした高木氏の「自作による経費削減法」は倉庫の建設にまでおよび、整地から基礎作り、本体の組み立てまですべて1人でこなして、150㎡もの大型倉庫を作り上げてしまった。

スケールメリットを追求する大規模農業とは対極に位置するのが、高木氏のスタイルである。中山間地での水田経営に適応した、ローコストで最大の利益を上げる経営術といえるが、年を追うごとに受託面積が増えていく問題も抱えている。2006年3月には自らが発起人となって「担い手協議会」を発足させており、地域農地の適正管理に向けた高木氏の活躍が期待されるどころだ。